

A. サン＝レオン著『ステノコレグラフィ』におけるグリセの変容

赤塚健太郎（成城大学）

本発表は、バレエの歴史において重要動作とされてきたグリセの変容を、アルテュール・サン＝レオン著『ステノコレグラフィ』（1852）の読解とその練習課題の検討によって明らかにすることを目的とする。その際、グリセと関わりの深いタン・ド・クーラントにも着目する。

グリセは、足を地面に触れたまま滑らせるすり足動作であり、ファイエの『コレグラフィ』（1700）において、バレエの技術を構成する重要な要素の一つとして定義された。同書が公にしたダンス記譜法においてもグリセは独自の記号を与えられている。踊り手が描く軌道を書き記すファイエの記譜法において、グリセを行いながら一步分の移動を行うステップはパ・グリセと呼ばれ、数多くの振付で使用された。

このパ・グリセというステップは、それ自体としては単なるすり足の一步であり強拍を示さない。しかし、その場で行うプリエとエルヴェ（ドゥミ＝ポワントへの伸びあがり、すなわち強拍を示すムーヴマン）で体を高めた後にパ・グリセの一步を続けることで、強拍を示す独立した拍節単位としての資格が与えられる。この一連の動作はタン・ド・クーラントと呼ばれ、ファイエの理論書に実践例が豊富に掲載された。

伸びあがった体勢で行うすり足により荘重な身体を誇示するタン・ド・クーラントは、劇場の振付からはやがて姿を消していったが、すり足の練習課題としては長命を保った。ラモの『ダンス教師』（1725）やマグリリの『ダンスの理論と実践』（1779）などで解説されただけでなく、19世紀に入ってからミシェル・サン＝レオン（アルテュールの父）の手稿の練習帳（1829）などで重要な練習課題とされ続けているのだ。この間、タン・ド・クーラントの動作は本質的には変化しなかったことがハモンドの先行研究（1984, 1992）で明らかとなっている。

しかし19世紀半ばになると、タン・ド・クーラントはバレエ練習の場からも姿を消そうとしていた。それと平行して、従来注目されてこなかったが、タン・ド・クーラントを特徴づけるすり足動作であるグリセも大きな変化を見せる。その様子を示すのが、本発表の注目するアルテュール・サン＝レオンの理論書『ステノコレグラフィ』（1852）である。同書は、独自のダンス記譜法を確立するとともに、その記譜法を用いて20を超えるバレエの練習課題を掲載し、さらに文章による説明も付加した。

サン＝レオンの『ステノコレグラフィ』における記譜法解説を見ると、ファイエと同様にグリセはすり足動作として定義され、曲線状の記号を与えられている。しかし、動作説明と共に挙げられた三つの実践例は、いずれも開いた脚を支脚に向けてすり足で引き寄せて閉じるだけであり、グリセによる移動は見られない。またグリセの記号は、二つの動作記号間をつなぐように用いられている点も注目に値する。サン＝レオン自身はこの記号を音楽におけるレガートに例えているが、レガートが音自体ではなく音をつなげた演奏を示すのと同様に、グリセも独立したステップとは見なされず、動作のつながりへと変貌しているのだ。

さらに、『ステノコレグラフィ』に掲載された練習課題を詳細に検討すると、グリセの大きな変容が確認される。まず、父ミシェルが詳細に記述したタン・ド・クーラントは継承されず、『ステノコレグラフィ』には姿を見せない。これは、強拍を伴う拍節単位としてのすり足ステップが放棄されたことを意味する。

一方、タン・ド・クーラント以外では、練習課題9と10、25においてグリセが明確に使用されている。このうち練習課題25では、小節線を跨ぐ形で、プリエをした状態で前に進める一步にグリセの指示が付されている。これは、後続する跳躍を準備するための動作として機能する。低めた体をすり足で運ぶことが跳躍に向けた踏切の準備動作になっているのであり、グリセが主たる動作ではなく、別の動作のための準備へと変質していることが確認される。

それに対し、練習課題9と10はクペというステップの練習であり、その冒頭で両脚プリエから一脚を空中へ伸展する際のつながりとしてグリセが指示されている。ここで、本来すり足動作であったグリセによって脚が宙へと投げ出されていることが注目に値する。グリセが従来示してきた地面上で足を滑らせる動作としての性質は放棄され、足を地面にこすりつけるような印象が与えられさえすれば十分になったのだ。またこの二例からも、プリエで低めた体勢における準備動作としての性格が強まっていることが読み取れる。

このように、『ステノコレグラフィ』に掲載されたグリセの説明や関連する練習課題を検討することで、グリセが独立したステップ単位としての地位を喪失して動作のつながりや後続動作の準備となったこと、またその本質である絶えざる地面との接触も不要となったことが確認される。以上の変容から、グリセが、すり足自体を主題化した動作としての性格を弱め、他の主たる動作に奉仕する一種の表情付けへと変化していったことを読み取ることができるだろう。